

○賈生爲長沙王太傅三年、有鶚飛入賈生舍、止于坐隅。楚人命鶚曰服。賈生既以謫居長沙。長沙卑溼、自以爲壽不得、傷悼之。乃爲賦以自廣。〔史記會注考證卷八十四〕「屈原賈生列傳第二十四」

○誼爲長沙王傅。三年有鵬鳥、飛入誼舍、止於坐隅。鵬似鶚不祥鳥也。誼既謫居長沙。長沙卑溼。誼自傷悼。以爲壽不得長、迺爲賦以自廣。（賈誼が長沙王の守り役になつて三年経つたある日、鵬鳥が家の中に飛んできて、誼のそばに止まった。鵬は梟ふたろうに似た不吉な鳥である。時に誼は流され者として長沙に住んでいた。長沙は低くじめじめした所であつた。誼は我が身の上を悲しんで、寿命は長くあるまいと思ひ、賦を作つて気持を晴らした。）
（傍線筆者）（本文・訳ともに全釈漢文大系27『文選（文章編）二』一八八頁より引用）

筆者は道真がこの十二句「誼舍在長沙」の表現をするにあたり、先の引用文に傍線を付した箇所、賈誼が左遷された土地「長沙」が「低地で湿気が多く、自分の身の上を案じて命の長くないことを悲観していた」そうした状況に比して、この道真の住む太宰の地は、まだましではないかと自らを慰めているといった解釈は表層的なものをなぞる次元に止まっているように思える。この賈誼の故事に込められているものを、更に慎重に読みとく必要性を感じる。そこで、「賈誼」が唐代の詩人、とりわけ投影関係が指摘されて久しい白詩を例にどのよう^にに認識されていたのかを考察してみたい。「長沙」を検索語として見出し得るものなかで、「賈誼」を「屈原」との対比の中で引いている次の二首に注目してみた。